

國學院大學學術情報リポジトリ

談話室 32歳のモーツァルト

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 礒山, 雅, Isoyama, Masashi メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00000157

32歳のモーツァルト

礒山 雅

モーツァルトに、交響曲第40番という作品がある。別称「ト短調交響曲」。20曲に1曲ぐらいしかない短調曲の一つで、憂いを帯びた旋律の美しさで親しまれている。同時に、バッハ、ヘンデルを思わせる対位法を随所に織り込んだ、密度高い作品でもある。

一昨年、アマチュア・オーケストラのトップ奏者の集合するプロジェクトがあり、視察の必要があつて訪問した。ト短調交響曲が学ばれ、めざましい上達のもと、公開コンサートの段取りとなつた。演奏に先立ち、実行役員の方が次のようにコメントされた。「この曲はモーツァルトが貧乏のどん底にあつたときに、それでも一生懸命に作曲した曲なのです」。

それからまもなく、BBCのニュースを見ていたら、ロンドンで交響曲第40番の演奏される映像が流れた。英人キヤスターの加えたコメントは、「この曲は、モーツァルトがもつともたくさんの作品を作曲した年のものです」というものであつた。

同じ曲に、まったく異なる情報が与えられたわけである。前者は作曲者の境遇について情緒的に述べ、後者は作品数について客観的に述べている。聴き手はずいぶん違う方向に誘導されることになるが、読者はどちらのコメントをよしとされるであろうか。

私は、英人キヤスターのコメントに、大いに感心した。それがあまり認識されることのない事実を端的に指摘し、結果的に正しい方向を指し示しているからである。交響曲第40番が作曲されたのは1788年。時にモーツァルトは32歳、新作はこの年30を数えた。その中核をなすのは、第39番変ホ長調、第41番ハ長調《ジュピター》にト短調を加えた

「三大交響曲」である。すなわち短調交響曲は、モーツァルトの創作力が頂点に達し、そのいわば怒濤のような高まりの中で生み出されているのである。多産の年という指摘は、充実期の意欲的な作品というイメージを言外に含んでいる。

「貧乏のどん底」と言われたらどうだろうか。脳裡に浮かぶイメージは、失意、悲哀といったものであろう。たしかにそれは、この短調作品の一面を捉えている。だが、「失意」の中で、人は最大数の作品を生み出すことができるだろうか。また、第40番のすぐ次に明るく力に満ちた《ジュピター》が屹立しているという事実は、どう説明したらいいのであろうか。たしかに「悲哀」は、存在すると思う。だがそれは、表現としての悲哀であって、意欲的な構想と十全な取り組みがあつてこそ、真に表現できるものである。モーツァルトは、続く《ジュピター》との対比において、また先立つ第39番変ホ長調との対比において、短調の表現世界を掘り下げているのである。

ではなぜ、1788年に作品数が多いのだろうか。クリストフ・ヴォルフによれば、それは1787年の暮れに、モーツァルトが皇帝ヨーゼフ二世によってウィーンの宮廷作曲家に取り立てられ、意欲を掻き立てられたためであるという。従来この任命は、実入りのない形だけのものとして、気の毒な境遇の象徴のように考えられていた。しかしヴォルフは、その任命がモーツァルトの実力を知悉する皇帝の巧みな人材登用であり、自由な創作へと彼を鼓舞するものであつたことを、詳細な資料の分析によつて明らかにしている。このあたりを詳細に論じた『モーツァルト最後の4年』栄光への門出』（春秋社）という著作を私は昨年12月に翻訳したのだが、その作業は、目から鱗の落ちる思いの連続であつた。

ちょうど第40番が作曲された頃、モーツァルトはプフベルクという商人に、お金の無心を始めた。「貧乏」の通念は、借金を依頼する手紙が4年にわたり遺されていることに由来する。

だがモーツァルトは、ウィーンでの10年間、ほぼ一貫して高額所得者だったのである。収入は開業医並みだったのであるが、気張った生活様式（とギャンブル？）に由来する高額の支出が、借金へとつながつた。そのあたりの事情は、ヴォルフを待たずとも、モーツァルト研究者がとくに把握していたことである。しかし貧困説は、もぐら叩きのように現れて止むことがない。どうやら、天才作曲家はおしなべて薄幸であつて欲しいという願いが、世の人にあるように思われる。

万葉集と楽府系歌辞

— 相聞歌から相聞四時歌へ —

『万葉集』の桃花と中国文学

— 大伴家持の「桃李花の歌」の形成 —

道行の挽歌史

— 万葉集巻三理願挽歌の「晚闇跡」に及ぶ —

『万葉集』の渡来系氏族

— 梅花宴を例として —

「飛鳥 明日香」

— 異文化をどう和化したか —

『万葉集』「泡沫」考

『河海抄』にみる「万葉学」

— 漢語・漢籍との関係を中心に —

『万葉集』の食の歌の位置

藤原宇合「悲不遇」詩の論

— 藤原宇合の賢者論 —

万葉歌人の漢詩

— 安倍広庭「春日侍宴」をめぐって —

辰巳 正明

鈴木 道代

居駒 永幸

梶川 信行

井上さやか

鉄野 昌弘

河野貴美子

寺川真知夫

土佐 朋子

高松 寿夫

山上憶良晩年の三部作における〈言志〉

— 「沈痾自哀文」「悲歎俗道假合即離易去難留詩」首并序 —

「老身重病経年辛苦及思兄等歌七首」における自己

『日本霊異記』と『金剛般若経集驗記』

— 經典の持つ「力」をめぐって —

『万葉集』と日本古代大陸移民

— 「東亜交往民」の概念提起について —

民俗のサクラと万葉のサクラと

儀礼における歌書の読誦

— 湖南省藍山県ヤオ族還家愿儀礼に行なわれる歌問答 —

万葉集と門前の歌 — 欄門の習俗との関わりから —

(資料紹介)

折口信夫「万葉集絵物語」の未掲載稿

(座談会)

万葉集と隣接科学

小川直之

大石泰夫

菊地義裕

上野誠

曹咏梅

(司会) 辰巳正明

小川 靖彦

山口 敦史

王 凱

大石 泰夫

廣田 律子

曹 咏 梅

小川 直之

バックナンバーの購読は、國學院大學広報課國學院雜誌編集係までお問い合わせください。(☎03・5466・0130)

〔資料紹介〕

新出資料 本居宣長直筆判詞 歌合四種 について

— 國學院大學図書館所蔵

武田祐吉旧蔵書の『林崎社中歌合』の翻刻と解題—

中澤伸弘

本居宣長の判詞のある「歌合」は既に筑摩版『全集』の別巻二に二十二本、同三に二十二本の計四十四種が翻刻されてゐる。これは主に本居家に伝来したものに加へ、諸方から寄せられた情報によつて蒐集されたもので、別巻三の解題において鈴木淳氏が「今回、発見できなかった『歌合評』が何處かにいまだ眠っていることは大いに考えられることである。」と書いてゐるやうに、まだ未発見のものがあることを示唆されてゐる。

実は國學院大學の図書館が所蔵する武田祐吉元教授旧蔵の寄贈図書（昭和四十年五月）の中に『林崎社中歌合』と称する、歌合が四本合綴されてゐる一冊があり、この四本の歌合の判詞が宣長の、しかも直筆のものであることが判明した。目録にも『林崎社中歌合』とのみあつてその内容については誰もが見過ごしてきたのであつた。今回これを偶然にもお茶の水女子大学の浅田徹教授が閲覧し、未見の宣長の判詞であつて、しかも直

筆ではないかとの疑問を中澤に託された。これによつて私が調査したところ明らかに宣長の直筆であり、『全集』に漏れた貴重なものであることがわかつた。

よつてここに翻刻紹介するとともに、宣長の「歌合」の中において本書の占める位置を改めて考へてみたと思ふ。

書誌

最初に本書の書誌を挙げておく。

写本一冊。竪二十二・八糎×横十六・一糎。本文五十四丁。表紙、黒（濃緑）地布表紙。見返し、金箔貼付紙。外題、白絹布墨書「本居宣長翁判／林崎社中歌合」中央に貼付。蔵書印「青谿書屋」方印（大島雅太郎）。昭和四十年五月武田祐吉寄贈。目次は次のやうにあり、元来左記のイゝへの個々の歌合が六種あつたことがわかる。

- イ、寛政三年春 三十六番哥合
- ロ、同 四年秋九月 哥合 林崎社中
- ハ、同 年春二月 十六番哥合
- ニ、同 六年正月 廿八番哥合
- ホ、同 哥合

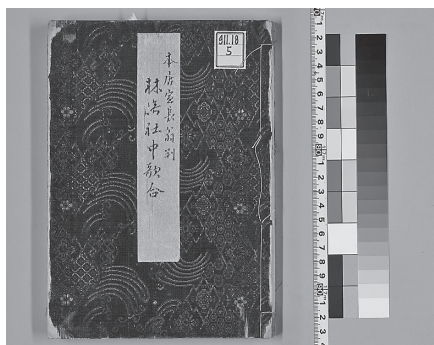
右 判者 舜庵 平宣長

へ、文化十一年宿館哥合 判者 末壽

このうちホ、への二種は現在合綴されてゐず、その存在は不明である。多分本書がこのやうな形に四種が合綴されて、今の形となつたものと思考される。どの歌合も一丁半葉に一番ひの左右の歌を配し、その左余白に判詞を加へたものである。よつて三十六番歌合は本文十八丁となる。和歌本文と判詞は別筆で、和歌本文の方は歌合ごとに筆跡が異なるが、判詞及び歌の訂正箇所は全て本居宣長直筆の同筆である。ここに翻刻にあたり歌数から適宜「三十六番歌合」「十二番歌合」「十六番歌合」「二十八番歌合」と題した。

「三十六番歌合」

一丁オ、表題に「寛政三年辛亥春／三十六番歌合」とあり、表題から一丁ウにかけて作者姓名録のメモ書きのやうなものが書かれてゐる。次いで二丁オに（先掲の目次）があり、六種の書名と判者の名が書かれてゐる。ウは白紙。三丁オからウにかけて（作者姓名録）となり、三十六人の名がその身分、住居地などとともに書かれてゐる。そのあと本文十八丁（合計二十一丁）、一番から十八番までの題は「山霞」、十九番から三十六番までの題は「梅薫風」である。ついで巻末に「飛入狂歌」と題して「山霞」「梅薫風」の題で二首を記す。



表紙

経先の歌が二丁（四首計八首）あつて、全体で十六番となつてゐる。本書に「林崎社中」とあることから、四種を合綴し新たに名をつける時に『林崎社中歌合』としたのであらう。

「十六番歌合」

一丁オ、表題に「待花二／寄鳥恋／十六番／二月歌合」とある。その裏に九名の（作者 姓名録）がある。次いで本文が八丁（合計九丁）、一番から八番までの題が「待花」、九番から十六番までの題が「暁」である。

「十二番歌合」

一丁オ、表題に「九月／紅葉深／暁／歌合／林崎社中」とある。その裏に八名の（作者姓名録）がある。次いで本文が八丁（合計九丁）、一番から六番までの題が「紅葉深」、七番から十二番までの題が「暁」、ついで追加として守緒、

「二十八番歌合」

一丁オ、表題は白紙。裏面に十四人の作者姓名録がある。次いで本文が十四丁（合計十五丁）、一番から十四番までの題が「梅薫袖」、十五番から二十八番までの題が「春恋」である。

翻刻凡例

一 國學院大學図書館所蔵 武田祐吉旧蔵書の『林崎社中歌合』（911.18／5）を底本として、そこに合綴されてゐる、本居宣長直筆判詞のある『寛政三年春／三十六番哥合』（『寛政四年』秋九月／哥合）（『寛政四年』二月／十六番哥合）『寛政六年正月／廿八番哥合』の四本を翻刻した。

一 漢字は表記のままに従つた。

一 適宜濁点を加へた。

一 変体仮名及び片仮名は通用の平仮名表記に、また繰り返し記号も平仮名に改めたが、平仮名の踊り字（ゝ）はそのままとした。

一 宣長による歌への直接の加筆訂正の箇所は括弧書きにした。

一 虫損、書き落しなどによる不明箇所は括弧書きでその旨

を註記した。

一 見せ消ちの箇所は傍線を加へ、傍らに訂正をそのまま加へた。

一 宣長の判詞の改行は本文のままにした。

一 歌はどれも一行書きであり、一つの歌の番号と判詞とをもつて一丁表(裏)となる。

一 歌の作者名は宣長の判詞の書き入れ後に、歌の右に記入されたものであるが、『廿八番哥合』については、歌の下に書いてあるが、翻刻にあたり、他の歌合同様に歌の右に揃へた。

一 目次にある『同哥合』と『文化十一年宿館哥合』とは共に本書には綴ぢられてゐない。

一 (表題)(目次)(作者姓名録)などの見出しは翻刻者が補つたものである。

一 一丁オからウにかけての作者姓名録はそのあとにある作者姓名録と重なるので翻刻においては割愛した。

イ、三 十六 番 歌 合

(表題)

寛政三年辛亥春
三十六番歌合

(目次)

寛政三年春 三十六番哥合

同 四年秋九月 哥合 林崎社中

同 年春二月 十六番哥合

同 六年正月 廿八番哥合

同 哥合

右 判者 舜庵 平宣長

文化十一年宿館哥合 判者 末壽

(作者姓名録)

寛政三年辛亥春

作者

從三位 定綱 作者定長

藺田 氏韶

九禰宜 守訓

菊谷兵部末偶

白子人 茂木

判者 本居宣長

外宮 貞蔭

益谷大學 末壽

七禰宜 守諸

益谷吉之允末晴

白子人 並木

白子人 直木	白子 昌平
一身田 祐秀	一身田 宗凭
津七里 政要 勘十郎	倉田山城守有成 津人
醫師 直章 津人	倉田金十郎英林
政式 津人	房氏
津 七里奥方玖能	同侍女 世繼
名古屋 大館内室 民	同侍女 美岐
小浦彦之允朝通 紀州家臣	松坂 直丸
三井 高蔭	松坂 常岳
本居 健亭 春庭	松坂 手纏
松坂 直道	松坂 式通 朝通同人
林伊右衛門利長 松坂	三谷景介 清通 松坂醫師
松坂 朝行	本居藤垣内翁 大平
(本文翻刻)	
山霞	
一番	
左 勝	定長
さきぬべき花のおもかげ立そひてかすむやいづくみよしの、山	
右	貞陰

神杉の木の間がくれにさほ姫がかすみの袖をふるの山もと	
左 四の句やもじすこしいかゝ かすみもいくへなど有つべし	
右 木間がくれにといふは聞なれず 三の句のがもいかゝ 霞の袖をふるとはいかなるをいへるに心得ず	
二番	
左 氏韶	
春されば雪と花とやみよしの、山の霞はたちかくすらむ	
右 末壽	
春もまだ浅間の山のいつしかと煙にまがひたつかすみかな	
左 たしかならず 雪を花と見よとてといふことか さは聞えず	
二三の句のいひかけの意おぼつかなし	
右 四の句でもじなくてよろしからず 此哥ハ二の句のものもじもよろしからず 此哥は春はまだ——の山もけぶりまがひて——と有べし けぶりにまがひてといひては霞のかたよわし けぶりまがひてといへば煙が霞にてまがふ也	
三番	
左 勝 守訓	
ふる雪の(も)しら髪と見し山眉も(の)けさはかすみて若がへりけり	

右

守 諸

くれなゐに雲のはたても色こくて朝日にかすむ遠の山端

左 眉を髪と見んことはいかゞ いひさまわろし 初句をふる雪も

とすべし もといへば髪と眉とは別なる也

右 上句すべていかゞ 又これは朝よりは夕の方に近ければ夕日など

いはん方まさるべし

四番

左 持

末 偶

五百重山うちこえつゝも来し春は霞にさへもまよはざりけり

右

末 晴

三輪の山霞の袖もかゝるかなしるしの杉のむかししのべど

左 上句いかゞ 又五百重山を越えきたればとて霞にまよふま

じきいはれいかゞ 霞にもまよはず五百重山をこしきめと

こそいふべけれ

右 聞えがたし

五番

左 持

茂 木 白 子

天のはら雪げの雲も春風にたえだえかすむふじのしば山

右

並 木 白 子

浅みどり木の芽はる風のどかにていづれかすまぬ山端もなし

左 春風といへばのどかなるさまなるに雪げの雲はいかゞ 初二句

時しらぬ高根の雪もなど有べくや 但しよみぬしの

心は雪げの雲も春風にたえだえになりてといふことな

らんか その意ならば雪げの雲もたえだえにといひては

聞えず たえだえかすむとは霞のたえだえほのかに立る

さま也

右

下句いひざまたがへり いづれといはゞいづれの山端もかすむといふべく
かすまぬ山野もなしといはゞいづれといふにかなはず

六番

左

直 木 白 子

ふるとしはしらぬ霞に跡見えて春のこえけむ相坂の山

右

勝

昌 平 白 子

起いで、まづうちむかふ山端に春たちそむる朝がすみかな

左 いひざまさだかならず よみぬしの心は霞の立たるによりて

春のこえたりいふ跡の見ゆといふ意なるべけれど 霞に

跡の見ゆるといふこともいかなるうへに ふるとしはしらぬといふ

こともをさなきいひさま也

右 させることなく少しをさなければ聞えたり

七番

左 持 祐秀 一身田

明わたる空ものどかに足引の山端とほくたつ霞かな

右 宗凭 同

春くれば松ふく風も音たえてながむる山のかすむのどけさ

左 下に明わたるのあへしらひの詞あらまほし

右 ながむるいかゞ 無用の詞也

八番

左 勝 政要 津

うちなびき春来にけらしほのぼのと明る外山のかすむのどけさ

右 有成 同

天の戸を明ゆく空の朝霞立田の山は遠ざかりぬる

左 けらしと結のことかけ合わろし 霞たな引などちむべき也

右 下句いかゞ 立田は西の方にあればことよろしからず 四の句

はもじもいかゞ 立田山に限りて遠ざかるやう也

九番

左 持 直章 同

佐保姫の霞の衣いろはえてけふたちそむる四面の山端

右 英林 同

峯にたつ煙まがはぬうすがすみ春も浅間の山とこそ見れ

左 三の句あまりて無用の詞也 三四の句をたちそめて春こそき

ぬれなどあらまほし

右 下句いひざまわろし 春もまだ浅間の山は峯にたつ

——うすがすみかなとこそ有べけれ

十番

左 政式 同

よし野山にははぬさきも花の色の面影にたつ春霞かな

右 勝 房氏 同

雪に見し面影かへて鏡山くもるや春のかすみなるらむ

左 二の句わろし 三の句色のも無用の詞也 上句まださかぬ

花の梢もよしの山と有べし

右 よろし

十一番

左 持 政能 同

浅みどりはやそめかけて佐保姫の霞の袖もにほふ山端

右 世繼 同

煙たつ浅間がたけはいとゞなほ見えわかぬまで霞たな引

左 初二句柳の哥とも聞えたり 霞の袖もにほふとは何に

にほふにか 霞の外ににほはず 物あるやう也いかゞ

右 いとゞなほといふは近世のよろしからぬ詞也 四の句も

いかゞ をさなし 猶いひぎま有べし

十二番

左 民 なごや

佐保姫の霞のころも春ふかくすそ野をかけてこむる山端

右 勝 美起 同

きのふまでまぢかく見えし山端もたえだえにこそかすみそめけ

れ

左 こむるいうならず 又すそ野をかけてといひて山端と留り

たるもいかゞ

右 結句をさなければ聞えたり

十三番

左 勝 朝通 以下松坂

いつしかと春こそ来ぬれ雪きえて霞にうづむ四面の山端

右 直丸

いつのまにをちこちこめて山端の見えぬばかりにかすみ春かな

左 二の句春——来ぬればと有べし

右 いつのまにといひて かなと留りたる てにをは不調

いつしかといつのまにとは下のてにをはのあしらひかはること

なり 此哥はいつしかと、はいひてかなへり 二の句無用

十四番

左 高蔭

大原やをしほの山のみねの松千とせをこめてかすみ春かな

右 勝 常岳

時しらぬ高ねも春はたちこめてかすみにきゆる富士のしら雪

左 四の句までたゞ祝の哥のやうにて霞にはかに立たり

右 たちこめて 少し口をし 二三句高根の色も春くればなど有べし

十五番

左 勝 春庭

いつとなくふる白雪も立こめて霞時しるふじのしば山

右 手纏

春日山いづる日かげもほのぼのと霞をそへてにほふ空かな

左 聞えたり

右 霞をそへていかゞ 霞をそひてとこそいふべけれ

十六番

左 勝

直道

あらたまる春のそらとてふじのねの雪さへ見えすたつ霞かな

右

式通

春くれば花よりさきの面影にかすみそめたるみよしの、山

左 大體聞えたり

右 花よりさきの面影をば何の面影ぞ 二三花のおもかげさき

だちてなどこそ有べけれ

十七番

左 持

利長

見わたせばよもの山端ほのぼのと煙にまがふ春かすみかな

右

清通

あなたにも春ぞ来ぬらむ足引の山辺のどかにかすみなりけり

左 煙より所なし

右 あなたの事用なし なりけりと留りたるもかなはず

十八番

左 持

有行

天のはら煙も雪もたちこめて春にかすめる山はふじのね

右

大平

よし野山さえあへぬ雪もたちこむる霞や春の光なるらむ

左 山はふじのねといふ詞のいひざまいたくたがへり

下句春はひとつにかすみふじのねなどこそ有べけれ

右 とりしまりなき哥也

梅 薫 風

十九番

左

定長

咲いでし木末やいづこ梅が香を袖に吹いる、園の春風

右 勝

末壽

たづね見ぬこと里人もしのべとや梅が香さそふ四面の春風

左 上下かけ合わろし 初句のいでもいらぬ詞 いづこと

疑ひたる 詮もなし

右 さそふ 猶有べし

廿番

左 勝

氏韶

打はへて霞の網をはる風のもれてや梅の香に、ほふらむ

右

貞陰

梅花めぐる物をはる風のいつの人まに香をぬすむらむ

左 趣意はめづらかなれど網をはる風など梅の哥にはい

ならず されどよくよみと、のへられたり

右 ぬすむも又いうならず これこの詞は哥からによるべし 又めかれず

見てみたらんには香をよそへぬ すみゆくことをばいかに

してかしらん 香をぬすむことはよそのぬすみゆきたる歌の人ならで

はしるまじきこと也

廿一番

左 持

守訓

香をはこぶほどもあらしにさそはれてつひに花さへちらんとす

らん

右

末晴

春風のやどりととへば梅の花咲てにはへる庭のこのもと

左 はこぶいうならず 程もあらしいか、 つひにもいか、

右 梅の木本を春風のやどりとはいひがたし とへばもいか、

私がやどりは梅の木本でござると答へたるにや 庭の
もいらぬ詞也

廿二番

左 持

末偶

梅がかを袖にうつして朝戸出のさむさわする、庭の春風

右

守諸

咲みだる庭の梅が、春風ににはひみちくる釣簾のあけぼの

左 四の句火をたきてあたりたるやう也

右 みだる みちくる みないか、 みすの曙もいか、

廿三番

左 持

茂木

たがやどの梅の梢をさそふらむ花なき里もにはふ春風

右

昌平

たが里にさきけむ梅をさそひきて花のかあかぬ軒の春風

左 三の句さそひきぬらんとはいはでは意たらず 其うへ梢を

さそふもいか、

右 二の句けむもいか、 四の句あかぬ上とかけ合なし

廿四番

左

直木

ふる雪の柴の戸ほそもかをりを来て梅より春の風はたつらん

右 勝

並木

梅の花さきそめしより吹風にあらぬ梢もかつにほひけり

左 聞えがたし

右 三四の句聞えたれ共吹風にはあらぬといふやうにふと

き、なされて少し心ゆかず

廿五番

左

祐秀

梅がえはそれともわかぬ朧夜に吹風にほふ窓の春風

右 勝

有成

夕くれば色こそ見えねさそひくるにほひにしるし梅の下風

左 風二ツあるはいかゞ

右 色見えぬは夕ぐれならず共夜ならばいよいよなるべし さそひくる

にほひにしるし梅花色こそ見えねよはの春風とあらばよけん

廿六番

左 持

政要

色よりもあはれぞ深きたが里の梅が、おくる風としらねど

右

宗凭

春の来ていくの里も此ころは風ものどけくにほふ梅が枝

左 色よりもといへる 下にかけてあはず

右 下句いひざまわろし 初句梅咲て 下句花のか深く

匂ふ春風と有べし

廿七番

左 持

直章

梅香の空にみちてや此ころは花なき里にもほふ春風

右

房氏

ねやの戸のすき間の風にもほふなり軒端の梅の花の盛は

左 梅が、や空にみつらんと有べし

右 ねやといはゞ 夜にてあらまほし

廿八番

左

政式

春風は梅の木の間を過ぬらむにほひになびく青柳の糸

右 勝

英林

はてはうき物としらでや梅の花にほひを風にまかせそむらん

廿九番

左 このまいかゞ 糸無用 青柳のなびくもにはふ春
風は梅のたち枝や過てきぬらんなどあらまほし
右 上句さくらの風情にちかし 結句そめけむなるべし

左 持

玖野

咲しより色ぞゆかしき梅の花袖にかをりてかよふ春風

右

美木

うめの花猶このもとに立よらむにほひ吹くる風のしるべに

左 初句無用のこと也 二の句もいかゞ

右 二三句いかゞ

三十番

左

民

咲そめし梢やいづこ春風の吹くるごとにはふうめが、

右 勝

世繼

わがやどのみぎりの梅の咲しより手折ぬ袖もにはふ春風

左 咲そめしと吹つるごとにとかけあはず いづこも用なし

右 みぎりいかゞ

三十一番

左 勝

朝通

津の国の難波わたりに咲梅のにはひはよみにみつの浦風

右

常岳

梅さけばのどかなる日にもにはふ香に吹とはしるき春の夕風

左

上句いひざまわろし 二三の句難波の梅の花さかりを

いふべし わたりにといふこと 此哥にはよろしからず さ

かりといふにて匂ひのみつるによくかけ合へし 哥は かやう

の所に心をつくべきわざ也 下句はよろし

右 二三の句のどけき庭の春風も 結句——き花の匂ひに

などいふべし

三十二番

左 持

高蔭

よ、経てもあかれぬ花のにはひかな春やむかしの梅の下風

右

直丸

かばかりに吹くる風のにはへるは梅津の里のさかりなるらん

左 あかぬをあかれぬといふことなし

右 初句にもじわろし かくばかり成べし 三の句にはふはといふべき所也

すべて今よの人 にほふとにほへるとを同じ意に

つかふはひがごと也 すべて此格の詞みな同じ

三十三番

左 持

春庭

吹すぎて又たが袖にかよふらむうはの空なる風のうめが香

右

式通

咲つゞく梅津の里の八重霞しるべへだてずにほふ春風

左

おかし 二三と四とよくかけ合たり

右

つゞく少しいかゞ 結句の句ふもなき方まされり 初句

咲句ふ 結ぬ(す) 春風ぞふくと有べし

三十四番

左

直道

春風の吹くるまゝによそながら立けるばかりにはふ梅が、

右

勝

手纏

梅の花さけるさかざる里わかでいづこもにはふはるかぜぞふく

左

三四句いかゞ 古哥の立よるばかり有しよるとはいたく趣

ことなるを

右

下句うちひらめなれど聞えたり

三十五番

左

利長

いろ見えぬ山がくれの梅が、は吹くる風に人やしるらん

右

勝

大平

立よればをらぬ袂もさく梅のかごとがましくにはふ春風

左

初句の色いかゞ 此哥桜の風情にちかし 三の句香

はといへるもいかゞ

右

おかし

三十六番

左

勝

有行

立よれば春やむかしの涙さへこぼれて袖にはふ春(夕)風

右

勝

清通

たがやどの木のもと過し風ならむ軒端のどかににはふ梅香

し されど落題なれば

左

新古今の風情 涙さへこぼれて袖に句ふいとおもしろけれど今少し

いかはせん

いひざま有べし 春も二つ有 涙さへこぼれて句ふ

梅花春やむかしの袖の夕風とも有べし

右

上下かけ合 なきがごとし たゞ吹風に軒端のどかに句ふ

梅が、としても同じことなれば也 上句大かたは吹としもなき春風のなどあらば下によくかなふべし

(卷末記入)

飛入狂歌

山霞

目がねさへ鼻の高根にかゝる也此目も春はかすむ老人

梅薫風

えならずよ軒の梅がゝこき交せて匂ふかは屋のまどの春風

口、十二番歌合 (中澤註 追加四番あり)

(表題)

九月

紅葉深

暁

歌合

林崎社中

(作者姓名録)

左

泉藏人 舍輝

澤瀉伊織 常尚

桐少進 邦壽

中川和泉 經先

右

井面 守訓

益谷 末壽

菊谷 末偶

蘭田 守諸

判者 本居宣長

(本文翻刻)

紅葉 深

一番

左

色かへぬ松さへ秋は紅葉にくわ(は)、る山の唐錦かな

右 勝

立田山かけゆく袖も紅の色ぞてり添秋のもみぢ葉

左 題の深の意なし くはゝるいかゞ 錦も縁なし

右 二の句かけは下と有べし

二番

左 常尚

露時雨いくしほそめて秋ふかき色にぞ出る木々の紅葉は

右 勝 末壽

明日よりは何を染まし村時雨紅葉は色のかぎり成ける

左 いくといひてぞといへる てにをは不調

右 結び けりと有べし

三番

左 持 邦壽

峯麓染も残さず紅のにしき色こき山の紅葉は

右 末偶

もみぢ葉の色さへふかき立田河から紅に波ぞさわげる

左 錦縁なし

右 落葉也

四番

左 持 常尚

明日までの時雨もしらず行秋に木々の紅葉の色増りける

右 末偶

時雨でもつれなき松をこゝろさへふかめてかゝる蔦紅葉哉

左 初二句心得なし行秋もいかゞ 結びも色ぞまされといはではてにをはい

かゞ

右 三四句いかゞ

五番

左 勝 邦壽

夕日さす遠の高根の紅葉は(は) よそめも色のかぎりとぞ見る

右 守訓

そめそめし梢もわきて此夕入日いざよふみねの紅葉は

左 聞ゆ

右 わきて不叶 四の句いかゞ

六番

左 持 舎輝

妻どひの色もそふかと思ゆる哉鹿鳴山の深き紅葉は

右 末壽

おそくとき梢もわかず染尽す色は千人の木々の紅葉

左 妻恋の色いかゞ

右 おそくとき梢 いかなることにか

暁

七番

左

邦壽

鳥の音もきこえぬ里の暁はかたぶく月を哀とぞ見る

右 勝

末壽

つくづくと身のうきことをおもひ出てね覚わびしき暁の床

左 鳥のね 聞ゆる 里はかたぶく月あはれならざる物にや

右 出ては つゝなるべし

八番

左 持

舍輝

山かづら暁かけて響さくる尾上の鐘の知らず閑けき

右

末偶

今こんの空たのめさへつきはてゝきゝうかりける暁の鐘

左 三の句いかゞ

右 上の句いかゞ

九番

左 持

常尚

ながき夜もあかつきかたになりぬとやゆふつけ鳥の知らず数そふ

右

守訓

今はとて立いでねども旅枕聞てうれしきあかつきの鳥

左 やといひてそといへる不調

右 初二句心得がたし

十番

左

常尚

つくづくとね覚め侘しき暁の鐘より後も夜半ぞ久しき

右 勝

末壽

里遠み鳥の音聞かぬ山住もね覚にしるきあかつきの空

左 暁のかねより後をよはといへることいかゞ

右 しるき 少しいかゞ

十一番

左 持

舍輝

誰か今うしとおもはん鳥の音の我に嬉しき寢覚をぞする

右

末偶

暁とつげの小枕打かへしむかしをしのぶうきね覚めかな

左 初二句いかゞ 四の句我にいかゞ すべての趣意もいかゞ也

右 枕をうちかへし といふこといかゞ

十二番

左 持

邦壽

衣々の別もさそふ暁のうきを知らざる鳥の声々

右

守訓

まじろまで物思ふ夜の嬉しきは暁つぐる庭鳥の声

左 一首の趣意 立がたし

右 二の句 夜のとはいかゞ 夜にとこそ有べけれ 庭鳥いかゞ 鳥のこゑ

かなと有つべし

追加

紅葉深

左 持

守諸

ちり残るは、その枝の一むらに時雨で染し色はまされる

右

経先

あだに置露の思ひの色に出て夕べや深き木々の紅葉は

左 上句いかゞ

右 上句いかゞ 四の句もいかゞ

左 勝

経先

露霜の沖津白波立田山秋をふかめて染る紅葉は

右

守諸

日にそへて色まさり行紅葉はやしほの岡の程ぞ見へけり（えける）

左 ふかめていかゞ

右 下句いかゞ 結句のてにをはいかゞ

暁

左 勝

守諸

鐘の音につげの枕をそばだて、聞もくるしき寢覚成けり

右

経先

ね覚めして何ものうくや思ひけん暁かけて鳥の啼らん

左 結句 うちひらめ也

右 二三句てにをはいも不調 聞えがたし

左 持

（名欠ク）

鳥の音にうきねの床の夢覚てまた物おもふあかつきの空

右

（名欠ク）

聞もうし別れしまゝの閨の戸に夢の名残の暁のかね

左 うきねの床いかゞ

右 恋の哥也

ハ、十 六 番 歌 合

(表題)

待花二

寄鳥恋

十六番

二月歌合

(作者姓名録)

左

舍輝

坂常陸

尚品

邦壽

岩井田

判者 本居宣長

待花

一番

左 持

舍輝

山桜一木を庭に移しうゑて花待宿となる春かな

右 末はる

さくをりは咲べき花とひたすらに思ひかへせと忘れやはする

左 下句いかゞ

右 初二句いかゞ ひとすらいかゞ 結句わすれぬかなといふべきいほひ

也 すべて題にうとし

二番

左 持

尚品

つらきまで花を待乳の山桜俯みゆる峯の白雲

右 常尚

さきぬやと分る山路は風さえて花に見まがふ雲だにもなし

左 初句いかゞ 四の句も力なし

右 下句いかゞ

三番

左 持

邦壽

春きてもまだ咲やらぬ花ゆゑに心尽しの日数をぞふる

右 經先

待としも思はゞ春はまだきとものとく咲出よ花のしたひも

左 初句いかゞ 桜は春来てやがて咲物にはあらず

右 初句しもいかゞ 三の句聞えず 下紐よしなし

四番

左 勝 尚友

まてばこそさかぬもうけれなかなか思ひすてゝぞ花にまかせ

む

右 末偶

初花の匂ふ木すゑは高砂のまつにかひある山ざくらかな

左 結句ぞもじ すこししてよはし けれど聞えたり

右 題にかなはず

五番

左 持 末晴

待わびる心もしらでつれなくもまだとけやらぬ花の下ひも

右 常尚

峯の雪それとばかりの面影にいとゞ待るゝはなのさかりを

左 わぶるをわびるといふは俗言也

右 二の句いかゞ 終りのをもじ四の句にかなはず をといへば

四の句はまつとはいはではかなはず をまたるゝとはいひがたし

六番

左 持 尚友

見てくらす春の日数のすくなきを思へばいとゞ花ぞまたるゝ

右 経先

ちる花の名残のうきにくらぶれば咲ぬを待もなほまさりけり

左 初句いかゞ

右 四の句ももじ かなはず まさりけりもいかゞ

七番

左 持 末壽

山里は春こそ殊にわびしけれ花も人めもいとゞまたれて

右 (名欠ク)

咲ぬればもろくも花のちる物をいかにまたるゝ山桜ぞも

左 いとゞといふこと人めにはさもあるべし 花にはかなはず

花をまつは春のみことなれば也

右 二の句ももじわろし 山桜ぞもと留りたるいかゞ

八番

左

(名欠ク)

まぢりふるおなじ心に御蘭生の花や咲しと人のとひくる

右 持

末偶

この頃は光のどけき日にそへてしづ心なく花ぞまたるゝ

左 初二句いかゞ 御蘭生よしなし

右 二三のつゝいいかゞ 上句にそへて光のどけき 此ころはとこそ有へけれ

寄鳥恋

九番

左

舎輝

よをかさね待にむなく更行(ゆけ)ば恨数そふ鳴の羽がき

右 勝

常尚

恋くて稀に逢夜の暁をわりなく急ぐ鳥の音はうし

左 鳴の羽がき 俄にて四の句迄に趣意なし

右 結句 ねぞうきといふべきを はうしといふは近き世の

わろきくせ也

十番

左

(名欠ク)

逢と見し夢もあだなる春のよは物うくひすの涙をぞ添ふ

右 勝

経光

真葛原わが身鶉の床も(は)あれて恨がちなる秋風ぞふく

左 夜に驚いかゞ 結句のてにをはも をぞといへばそふると

いはではかなはず

右 三の句 ももじいとわろし はと有べし

十一番

左 勝

邦壽

言の葉はまだつれ(き)なくに暁の別れを急ぐ鳥の音ぞうき

右

末偶

君が家にほととくゆきて時鳥我かく待とうらみつげてぞ

左 言の葉いかゞ

右 ほととくといふこと聞えず 結句もいかゞ

十二番

左

尚友

思ひわびねられぬ夜半のうき事をそへて数かく鳴の羽かき

右 勝

常尚

山鳥のをちの鏡のそれならば餘所(よそ)にも人の影をだに見む

左 そへて数かく いかゞ

右 それならばいかゞ

十三番

左 持

末晴

とゞめても袖に涙は山鳥の長き思ひを哀とは見よ

右

経先

たのみにし人の心はあら鷹の逢みん事の程もしられて

左 とゞめてもやまぬとはいかゞ とゞめてもとまらぬとこそいふべけれ
思ひはおの仮字なれば尾のいひかけいかゞ 又長き思ひも縁なし

右 初句にしわろし 頼むとこそいふべけれ あら鷹縁なし

十四番

左 持

尚友

穴鳴き(なき)と人にはいひて慰めと心はすまぬ鳥の声かな

右

(名欠ク)

偽としれどもまたむ秋のよの長鳴鳥の聲を限りに

左 聞えがたし 心はすまぬも俗言也

右 偽としりながらまたんとはいかゞ

十五番

左

末偶

うらうらと霞がくれに行雁のほのみし妹に恋わたるかも

右

末晴

妹をこふ心は空にとぶ鳥のつばさもあらば行かよはまし

左 うらうらといかゞ

右 心はいふことかなはず 初二句妹こふる我身はなど有べし

十六番

左

邦壽

五月まつ心は同じほとゝぎす我のみ恋てしのびねになく

右

勝

末壽

山鳥の初尾の鏡はつかにも恋しき人の影も見てしか

左 何故に五月をまつにか

右 結句 影をなるべし

二、二十八番 歌合

(表題) なし 白紙

(作者姓名録)

左

右

末壽 末晴
守諸 舍輝
末偶 尚品
邦壽 守訓
常尚 經先
定長 尚友
守屋昌綱 古人

判者 本居宣長

(本文翻刻)
梅 薰 袖

一番

左 持

かたしきの誰なごりをとうき名のみかひなくた、む袖の梅が香

右

末壽 末晴

うつしとる匂ひならねど休らへば袖をやどりの梅の下風

左 三四句うき名やた、むと一句にてよき所也

右 四の句いかゞ

二番

左

おしてるや難波にさけるこの花に立よる袖もかをる春風

右

守諸 舍輝

思はずも袖の香ふかくなりけり梅の木陰に春日くらし

左 上下かけ合なし

右 結句桜のさま也 梅には少し似つかはしからず

三番

左

末偶

柴人の袖さへ花の香に匂ふ山路の梅やさかりなるらむ

右

尚品

中垣もこえて色香やおくるらむうめ咲頃の袖の夕風

左 三の句のびらかならず 二三句かへる袂も匂ふ也と有べし

右 上下かけ合わろし

四番

左

邦壽

梢にはいとふ物からさそひくる袖にうれしき梅の春風

右

守訓

ゆふやみに色は見えねど梅花ありとや袖にかをる春風

左 初二句桜にちかし

右 有とやといふことかなはず 古哥をよく考へたまへ

五番

左 勝

常尚

玉簾かゝぐる袖も匂ふかな軒端にちかき梅の朝風

右

守先

さくや此花は難波に名にしおふ梅吹風の袖にかをれる

左 聞えたり

右 上下かけ合なし

六番

左 勝

定長

かをり来て袖にうつりしうれしさをつゝむに餘る梅の追風

右

尚友

立よりて問へばいなやもわかぬまに袖にこたふる風の梅が香

左 うつりしはうつれるならではわろし 此けぢめをよく

思ふべきこと也 今の人は多く此わきまへをしらず

三の句をはもなるべし

右 此いなやは俗言になる也 とへばも何事を思ひたるにか

七番

左 持

昌綱

きえ残る春のそのふのゆきとしも見るにまがはぬ袖の梅が、

右

古人 文房奉納

吹かへす霞の袖もかをる覧なべて花ちる梅の追風

左 見るにまがはず いかゞ

右 吹かへす なべていかゞ 又ちらす共匂ひは有つべし

八番

左

末壽

天津空(風)をとめの袖も匂ふらし(ん)雲ぬに□(虫損)つ

る梅の春風(よもの梅香)

右

勝

舍輝

木ずゑより移る日影も花の香も袖にのどけき梅の下陰

左 空と雲るとは病也

右 聞えたり こずゑはこのまの方下陰にはよろしからん

九番

左 持

守諸

さきしより匂ひばかりを我袖にせきとめえたる梅の追風

右

尚品

をりかざす袖にしめつる梅が香に霞のひまもいとふ春風

左 四の匂いとわろし

右 上下かけあはず 下句聞えがたし

十番

左

末偶

香をとめて立よる宿の梅の花をらぬ袖し(を)も人やとがめむ

右 勝

守訓

ひとえだはたをりやせまし行摺の袖さへかをる梅のしたみち

左 香をとめてはこれは香をしるべに尋きたる意なれば袖に

香をとめたるとは別也 故に袖に香のとまりたる意いひ

しらず

右 聞えたり

十一番

左 持

古人

一えだの花に心のうつるより我袖しもぞ梅のかをれる

右

守先

一木だに袖にかをればもろこしの梅咲嶺の風ぞゆかしき

左 初句わろし 我いらぬ詞也 結句のもじわろし

右 題の薫袖の意はたらかず 二の句深く匂へばとしても同じこと也

十二番

左

勝

常尚

うめの花盛になれば木の本に立よる袖も匂ふはる風

右

尚友

梅さける垣ねはそこしらねどもさだかに匂ふ袖の春風(春の夕風)

左 聞えたり

右 薫袖の意はたらかず

十三番

左

定長

巻あぐる釣簾の外面の春風も袖にあやしく匂ふ梅が、

右

勝

邦壽

たが里の垣ねの梅をさそふらむ袖にあやしく匂ふ春風

左 初二句近世めきたるうへに下にさらにかけ合なし

あやしきもいかゞ

右 あやしういかゞ

十四番

左

昌綱

咲かたの垣ねもそこ吹風に梅のにはひの袖にみちぬる

右 勝

末晴

さかりなる木末をさそふ春風にたをらぬ袖も梅が香ぞする

左 初二句下につけ合なし みちぬるもよせなし

右 二の句いかゞ こずゑよりふくなど有べし

春 恋

十五番

左 勝

末壽

おもかげはおほろげならずしのばれぬ春やむかしの月のよなよな

右

尚品

二見がたかひてふあらば春のよの夢ばかりなる手枕もがな

左 上下かけ合よし 三の句は猶有べし

右 聞えがたし 二見がた何寺の開帳にか手枕を靈宝に

せんととてもとめたるにや

十六番

左 持

守諸

鶯の鳴音さびしき夕ぐれは君をかけつゝ物おもふかな

右

守訓

涙さへ袖にをやまずつれづれと春のながめに物おもふ頃

左 後世の風にてはいはゞいふべき事あれどこれはむかしの風と見て

あるべし それにとりては結句物ぞかなしきと有べし

右 聞えたり

十七番

左 持

末偶

春もまた君が心のさえさえてなみだのつらゝとけずも有かな

右 (虫損) 守晴カ

いつはりをたゞすの森のしみ縄長き春日にかけてちかはむ

左 初句またはなほなるべし 三の句いかゞ

右 偽をたゞすといふこと下につけ合わろし 春日も詮なし

十八番

左

邦壽

うき中の末野におふる若草のもゆるかひなき我思ひかな

右 勝 尚友

きくにさへうしや焼野に鳴きゝす我もこがる、おもひたへねば

左 うき中の末いかゝ 末無用也 生るともゆると重なれり

上に草のもゆるかひなきをといはでは四の句はたらかず

右 初句にさへいかゝ かくもうしやといひてことたれり

十九番

左 勝 常尚

つれもなき人の心の春霞隔てはてぬる契かなしも

右 (名 虫損)

朝かげに我身はなりぬ若草のもえ出るなす恋のしげけき

左 春霞といふことをのぞきても同じこと 又何にかへても同じこと

なれば題意はたらかず

右 上下むげにかけ合なし 其うへ上と下と詞のつが

ひもと、のはず

二十番

左 定長

したもえはまたうら若き恋草もむすばぬ(貼紙 結はん也) 露の契をぞまつ

右 勝 末晴

妻をこふ(こふる)野邊のきゝすもよそならで(ず) 同じ思ひに音をのみぞなく

左 下句聞えがたし

右 きゝすを を鹿にかへても同じこと也 されば必きゝすによ

れる詞を添ざれば其物うとく也

二十一番

左 昌綱

はる風の吹につけても青柳のいとゝこゝろのみだれ初つる

右 勝 (名 虫損)

雪ふかき野邊の若草したにのみもゆる思ひをしる人のなき

左 初いかゝ 又春風の吹につけて心のみだるゝ其よしなくてはいかゝ

右 初句冬めきたり 雪きえぬなるべし

二十二番

左 勝 末壽

はれやらで物をこそ思へ我妹子を忍ぶ軒端の春雨のそら

右 守訓

我恋は霞のおくの山桜いろに出とも人にしれめや

左 聞ゆ

右 四の句様のうたにはさも有べけれど恋の意の方にはいかゞ 色に

出とも人はしらむとはいかゞなれば也

二十三番

左 持 守諸

うち霞む春のよすがらてる月のおぼろげにのみ物思ふもうし

右 (名 虫損)

つゝめどもあだの大野の春霞うき名と共にたつがくるしき

左 かすむといひて照月はいかゞ 下句聞えがたし

右 あだの大野いかゞ あだといふこと此哥にはわろし 四の句いかゞ

霞と共にうき名のたつこそいふべけれ うき名と共に霞

のたつといひては霞のたつがくるしきやう也

二十四番

左 末偶

逢ことはかたみの衣はるのよの夢なりけりとかつ思ひつゝ、

右 勝 尚友

隔てなき心としら(なりせ)ば春かすみ空(千重に)にたつとも名をや(は)をしまむ

左 聞えがたし

右 直しのごとくあらまほし

二十五番

左 常尚

もえ出る心の色も若草のなびかぬすゑを待ぞはかなき

右 勝 末晴

分てなほ春の詠(ながめ)のつれづれに思ひまさりて袖ぬらしつゝ、

左 聞えがたし

右 初句いとゞしく 結句袖ぞぬれそふとあらまほし

二十六番

左 定長

春のよのおぼろげならで見し人の拂霞む月のしたふし

右 勝 舍輝

こひこひし涙のつらゝ打とけて逢ようれしき春の手枕

左 おぼろげならじ(で)見しとはいかなるをいふにか 月の下ふし心得ず

右 聞ゆ

二十七番

左 持 昌綱

雪きえぬ春の澤邊の草ならでもゆる思ひを人のしるかな

右

尚品

袖にせく思ひは深き涙河逢瀬のほどは霞へだて、

左 聞えがたし

右 結句 俄に霞立出て上にあらふによせなし

二十八番

左 持

古人

あふことはたゞ春のよの夢ばかりうつ、にこふぞたとへだになき

右

邦壽

人は今よ（そに 虫損 但し判詞から補ふ）のみしておぼろよ
の空行月の影だにもみず

左 下句いたくわろし

右 よそにのみしてとは雨夜などの月こそいふけれ 初句の今もいかゞ

解題

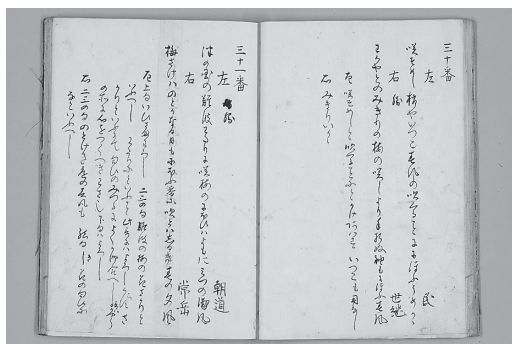
『林崎社中歌合』には時代の順に関係なく、四種の歌合が綴られてゐるが、本解題は便宜上年代順に一「寛政三年春三十六番歌合」、二「寛政四年春二月歌合」、三「寛政四年秋九月歌合」、四「寛政六年正月歌合」の順とし、別掲の各表における

符号もこれと同じにした。翻刻は綴じられてゐる順であるので、参照する場合には注意を要する。

一、「三十六番歌合」

四種の歌合のうち年代の最初のものがこの歌合で、寛政三年春に行なはれてゐる。出詠者は姓名録の順に姓を補ふと、佐八定綱（定長） 渡会貞蔭 蘭田氏韶 益谷末壽 井面守訓 蘭田守諸 菊谷末偶 益谷末晴 板倉茂木 村田並木 一見直木 白子昌平 森祐秀 後藤宗凭 七里政要 倉田有成 酒井直章 倉田英林 川喜田政式 芝原房氏 七里玖能 世繼 大館民美岐 小浦朝通 笠因直丸 三井高蔭 中里常岳 本居春庭 須賀手繼 竹内直道 松坂の式通 林利長 三谷清通 村上有行 本居大平の三十六人である。姓名録によると小浦朝通と松坂の式通が同人であることから総数は三十五人となる。この三十五人が「山霞」「梅薫風」の兼題で詠んだ二首を（小浦朝通は計四首となる）、歌合の主催者がそれぞれに一番から三十六番に番へて書いたものであり、それに宣長が勝・持をつけ、判詞を書いたものである。このことは、ほか三種の歌合にも共通する。

三十五人を地域別に分類すると伊勢の神宮の内宮関係者が佐



三十六番歌合

八定綱（定長） 渡会
貞蔭 蘭田氏韶 益谷
末壽 井面守訓 蘭田
守諸 菊谷末偶 益谷
末晴の八人、伊勢白子
が板倉茂木 村田並木
一見直木 白子昌平の
四人、伊勢一身田が森
祐秀 後藤宗凭の二
人、津が七里政要 倉
田有成 酒井直章 倉
田英林 川喜田政武
芝原房氏 七里玖能
侍女の世繼の八人、尾
張が大館民とその侍女美岐の二人、紀伊が小浦朝通（紀伊藩士
で松坂在か）と太平の二人、松坂が笠因直丸 三井高蔭 中里
常岳 本居春庭 須賀手繼 竹内直道 林利長 三谷清通の八
人である（それぞれ的人物の委細については註を参照）。

尾張と紀伊を除けばその多くが伊勢国に住む人物である。

『全集』載録の宣長判の歌合の多くが伊勢の門人に集中してゐ

るが、この歌合もその中の一つと言ふことができる。伊勢の地
に多いのはやはり宣長との地縁関係からくるものと思はれる。
特にこの歌合には伊勢においては内宮、白子、一身田、津、松
坂と宣長の地縁のある場所であり、それぞれの地で歌合に出詠
した者以外をも含めた鈴屋門の社中が形成されてゐたことが伺
へる。どの歌合にも言へることではあるが、少なくとも特定の
兼題で歌を詠むことを薦め、それを纏めてかやうに番ひにして
一冊に整へて宣長のもとに届けて判を依頼した人物がゐること
となる。

地域的に人物を見ると内宮では渡会貞蔭以外の八人中七
人はみな宣長の門人である。その中では天明四年に入門した菊
谷末偶が古参となる。古参とだけあつてこの四種の歌合にすべ
て出詠してゐる。（表一参照） ついで天明七年に入門した蘭田
氏韶、井面守訓、益谷末壽、梅谷末晴、またその翌年の八年に
は佐八定長と続いてゐる。また寛政元年には蘭田守諸が入門し
てをり、後述するやうに天明末年から内宮の祠官の宣長入門が
増加してゐる。その上、守訓、守諸、末晴の三人はこの他にも
ここにある二種の歌合に出詠してゐるのである。殊に特筆すべ
きは益谷末壽で彼はこの四種の歌合に出詠してゐる出精ぶりだ
である。末壽は内宮の古参である菊谷末偶の子であり、益谷家に